

## 第7回国際海藻学会議準備記

千原光雄\*

### プロローグ

1971年8月8日～12日第7回国際海藻学会議本会議、13日～17日会議後の関西における見学、観光、現地討議がそれぞれ無事終了した。参加登録者362名（国内214名、国外148名）、登録同伴者35名（国内13名、国外22名）、参加国籍数27カ国におよび、未曾有の盛会であった。なお、今回の会議での講演発表者数は特別講演4、一般講演119計123で、当初予想した数字90を遙かに上回り、これまた未曾有の盛況であった。

第7回国際海藻学会議 Seventh International Seaweed Symposium の日本開催については、日本が海藻類の利用の面で世界第一であること、他国では見られない海藻の栽培、養殖が行なわれていることなどの理由から、この会議の第2回会議頃から希望が多かった由であり、さらに第5回会議が1965年、カナダのハリファクスで開かれた時にもその要望がいよいよ高かったといわれる。事実、その翌年の1966年に東京で開かれた太平洋学術会議に参会した外国人海藻学者達の間には、別れの握手の時に“次は海藻学会議でまた日本で会おう”の言

葉を残した人達が実に多かった。そして、1968年9月にスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラで開催された第6回会議の国際諮問委員会(Advisory Committee for the International Seaweed Symposium)の席上で、第7回会議は日本で開催するよう、との正式の申入れがあり、日本代表の土屋靖彦委員はこれを引受けたのであった。

### 1968年

9月に日本からの参加者達がスペインより帰国してから、とりあえず、この会議の国際諮問委員会の日本代表である土屋靖彦氏（東北大）と、同会議に出席した西沢一俊氏（東教大）および在京の新崎盛敏氏（東大）と千原光雄等が集って、準備委員会の前段階ともいうべき世話人会（代表・西沢一俊氏）を作り、今後の措置などについて協議した。

急を要する大きなことからの一つに、この第7回国際海藻学会議を日本学術会議主催で行なうことの申し入れの手続きがあった。国際学術会議と銘打って日本で開催される会議の数は毎年20から30、ときにはそれ以上もあるが、日本の国費の補助による

\* 国立科学博物館植物研究部，第7回国際海藻学会議組織委員，庶務幹事。

The Bulletin of Japanese Society of Phycology, Vol. XIX. No. 3, 119—127, Dec. 1971.

ものは年に僅か2つか3つ程度である。当然のことながら、申請の過程において激的な競争があり、きびしい審査がある。国際会議を全くの淨財と参加費によって行なうことも不可能ではないが、国費による開催費の一部補助、学術会議事務局による事務上の手続きのスムーズさ、募金の免税、会議のオーソライズ、外国人参加者の入国の便宜などを考慮するとき、第7回国際海藻学会議は学術会議主催で開催するのがもっとも理想的であり、このことは関係者全員の一一致した意見でもあった。ところで、国際学術会議を学術会議主催で開催の提案をしようとするときは、手順としておよそ次の作業を進める必要がある。

(1)関係学会、機関等の協力→(2)学術会議の当該研究連絡委員会に資料提出、承認→(3)学術会議の関係部会の承認→(4)学術会議運営審議会の承認→(5)学術会議の総会における可決等々である。

海藻学会議の内容や性格から考えて、学術会議の運営審議会へは第4部(理学)と第6部(農学)からの共同提案とするのがよいことになり、このことから、学術会議の第4部の議員の原寛先生と第6部の檜山義夫先生に多大のご努力とご配慮をいただくことになった。原先生はその翌年芦田譲二先生と交替されたが、檜山先生は海藻学会議が終るまでいろいろとご努力をして下さった。国際学術連合会議 ICSU (International Council of Scientific Unions) に加盟していないことから、一時、海藻学会議の日本学術会議主催は難かしいのではないかと噂も流れたが、それが単なる噂だけに終わった過程には、檜山義夫先生はじめ

関係された学術会議議員の先生方のたいへんなご努力があったのである。

さて、学術会議の総会の回数と時期および大蔵省への予算案要求の提出期などを考慮すると、上述の手続きは年内の早い時点で進めねばならないことがわかり、まず、9～10月中に(1)の関係学会等の協力書を得る必要が起ってきた。早速、世話人会で協議し、また学術会議の関係者の方達のサジェッションをいただき、結局、日本水産学会、日本植物学会、日本植物生理学会、日本藻類学会の4学会に共催方を願うことになった。承諾書をいただくにあたって、当時それぞれの学会の会長あるいは評議員であられた大島泰雄、三輪知雄、高宮篤、時田邨、林孝三、広瀬弘幸の諸先生には多大のご高配をいただいた。

その後、手順を踏んで、趣意書と共催の承諾書を付した提案書をそれぞれ植物学研究連絡委員会と水産学関係の委員会に提出して審議をうけた。この際の審議に際しては、植物学関係では猪野俊平先生、水産学関係では檜山義夫先生がご努力下さった。提案書は承認され、各委員会の委員長を通じて第4部と第6部の部会で審議していただく運びとなり、さらに第4部長および第6部長を経て運営審議会に提出され、1969年5月に審議をうけることとなった。

### 1969年

年明けとともに、開催地、開催時期、会議の内容、運営の予算など、至急検討して決めなければならないことがらがたくさんでてきた。まず準備委員会を設立する必要がある。上記の在京世話人3人は学術会議の関係担当者と連絡を保ちながら再三集り

をもってきたが、丁度4月初めに東京で開かれる日本水産学会年会と日本藻類学会懇親会を機に、準備委員会の結成の準備にとりかかり、広く海藻の研究者および関係分野の方達に連絡して、準備委員会の委員になっていただくことを依頼した。会議は予定通り4月1日に国立科学博物館で開かれここに第7回国際海藻学会議準備委員会が発足した。当日出席をお願いした方は次の通りである。九州地区・田中剛、右田清治；中国地区・猪野俊平、小島良夫、藤山虎也；関西地区・荒木長次、今堀宏三、広瀬弘幸；中部地区・瀬木紀男；関東地区・新崎盛敏、岩本康三、片田実、須藤俊造、西沢一俊、三輪知雄、千原光雄；東北地区・金田尚志、竹本常松、土屋靖彦；北海道地区・近江彦栄、黒木宗尚、斎藤恒行、時田郁、中村義輝、長谷川由雄、正置富太郎、山田幸男；水産庁・松下友成；文部省・渋谷敬三、宮山平八郎；学術会議事務局担当官。

この会議で、準備委員会の委員長に土屋靖彦氏、幹事に新崎盛敏氏、中村義輝氏、西沢一俊氏、広瀬弘幸氏および千原光雄を決め、事務局は一応国立科学博物館に置くこと、そして当面の責任者は千原をあてることなどが決った。

1969年5月に開かれた学術会議の第350回運営審議会で、さきに申請してあった第7回国際海藻学会議の学術会議主催が正式に了承された。これによって、会議の日本開催の条件が整えられたわけである。早速6月17日に第2回準備委員会を開き、開催地を札幌にすること、会期を1971年8月8日～12日とすること、正式の会議名を第7回国際海藻学会議とすること、会議後の現

地討論会、採集会およびエクスカージョンを関西地方で開くことなどを決め、さらに案内文を内外国の関係ある雑誌に掲載方を依頼することおよび概算経費の明細などを決めた。予算経費の明細はその後学術会議事務局と再々検討して、大蔵省への予算要求の中に入れた。なお、この会議で、当初会場に考えていた北海道大学の使用が諸般の事情で無理であることがわかり、会場予定場所を札幌市内のパークホテルにせざるを得ないこととなり、このことは、以来、多額の会場費の捻出という点で委員一同の頭を悩ますこととなった。

7月から9月にかけて会議開催の案内文の掲載を内外国の関係雑誌約10誌に依頼した。この頃開催地の北海道では地区委員長に中村義輝氏を選出し、関係者が再々会合した。また会議後の舞台となる関西および隣接の地区では委員長に広瀬弘幸氏を決めこれまた再々会合を開き、ともに怠りなく受入れ準備に努力していた。

いよいよ12月となり、恒例の各省の予算折衝が行なわれる時期となった。予算についての一切は学術会議の関係者の方達にお任せしてあったが、12月から1月にかけて、幸い大蔵省の了承を得るところとなり、翌年3月27日の閣議において、第7回国際海藻学会議を学術会議主催でわが国で開催することの了解を得ることとなった。

この頃、準備委員会は経費の点で苦勞をしていたが、学術会議のはからいで、12月22日同会議内の国際会議運営基金より30万円の借入をした。借入は翌年7月にも行なわれ(70万円)、借入金の合計は100万円



新崎盛敏, 芦田讓二, 千原光雄, 広瀬弘幸, 檜山義夫, 猪野俊平, 伊藤広一, 岩本康三, 金田尚志, 小島良夫, 黒木宗尚, 正置富太郎, 松下友成, 中村義輝, 西沢一俊, 荻野珍吉, 近江彦栄, 斎藤恒行, 瀬木紀男, 関戸嘉明, 須藤俊造, 竹本常松, 土屋靖彦 (学術会議事務局関係の伊藤広一氏・関戸嘉明氏は後に関通彰氏・高富味津雄氏とそれぞれ交替)。

この日, 第1次サーキュラーができ上り組織委員会事務局の庶務担当が中心となり2,000部を内外の関係者に送付した。このとき, 予め英文で印刷したPre-registration用のハガキを同封し, 参加の予備調査を行った。この結果第2次サーキュラーのできる頃の9月29日の時点で, 回収したハガキの数は計373名(日本人151名, 外国人226名)であった。これは, 会議の出席者実数362とほぼ似た数字である。

6月18日 第1回実行委員会。本会議での招待講演, 外国人への招待状, 第2次サーキュラーの原案, プロシーディングス出版費の概算および募金計画の概要などを審議した。このほか, 国際会議へ出席の文部教官への国費からの旅費補助に關係して会議出席予定の文部教官のリストを作成した。さらに北海道地区と関西地区の今後の方針などについても協議した。

8月3日 第2回実行委員会。新装成った六本木の学術会議での初の会議であった。この日, 会議の経費, プロシーディングス発行の経費, 室蘭エクスカージョンの経費などの概算を算出検討して, 本会議参加費を30ドル(10,800円), 室蘭エクスカージョン参加費は別に5ドル(1,800円)と決

定した。このほか, 一般講演, 宿泊, レディースプログラム, レセプション, 関西エクスカージョンなどについて意見の交換があった。

本会議をあと1年後に控え, 開催地の北海道地区はいよいよ諸般の事項の実行段階に入るとのことで, 専門委員発令の依頼が本部にあり, 次の諸氏を依頼した。(8月10日)。庶務・館脇正和, 宿泊・吉田忠生, 財務・鑑照, 展示・阪井与志雄, 会場・舟橋説往, レディースプログラム・安藤芳明。

9月29日第3回実行委員会, 主に第2次サーキュラーの原案内容の審議と検討を行ない, 10月中旬に発行予定とした。このサーキュラーは英文15頁からなり, 原案を庶務幹事がつくり, 上述の審議と検討を経たあと, 英文についてはアメリカの専門家の校閲を得たものである。会議への参加申込, 講演申込, エクスカージョン申込フォームなども同時に作成された。これらは, 実際には印刷所の都合などもあって11月9日に納入された。部数は, さきのPre-registrationの数などから考えて1,000部としたが後に希望する者が多く現れ, 結果的には, 第1次サーキュラーの場合と同じように, ゼロックスによるサーキュラーのコピーを多数作らねばならない破目となった。

なお, この日の委員会では, 広瀬幹事の提出した資料をもとに関西地方のエクスカージョンについて検討を行ない, 申込先を名鉄観光KKとすること, 参加費を80ドル(28,800円)とすることなどを決めた。

この頃, もっとも委員達の頭を悩ませていたことは募金についての問題であった。すでに募金委員長の大役は新崎財務幹事が

引受けて下さり、募金準備委員会をつくり関東在住のこの分野に関係のある次の諸氏に専門委員になっていただき、数次に亘って会合をもち、また、さきの太平洋学術会議の日本開催に際して募金の中心となって活躍された松山義夫先生などにいろいろ募金についてお話を伺ったりした。しかし、いざ実行段階となると、その前にやるべきことがたくさんあった。なお、専門委員は秋山博一(全漁連)、大房剛(山本海苔研)、岡崎彰夫(東海大)、徳田広(東大)、星合和夫(協和醗酵)および組織委員である岩本康三、須藤俊造の諸氏および千原光雄である。募金活動は単に事務上の手続きや処理だけですむものではない。今回の海藻学会議のような場合は、全国的な組織網、立体的な募金体制、といったものの確立が必要となる。そこで、準備委員会としては、まず募金関係の基礎資料の蒐集と整理および調整などの作業を進めた。新崎委員長はじめ専門委員の方達は蒐集した大部の資料をもとに詳細な計画をつくることに努力した。また募金の後援会を設立するために、海藻学会議に広く関心と理解をもたれる各界の方達に会員になっていただくお願いなどもこの時期に進められた。このほかに、募金受入先を日本水産学会へお願いすることの交渉と手続き、募金免税措置の大蔵省と東京都への申請、募金趣意書の作成および封筒、申込用紙などの印刷の作業が進められた。募金趣意書や申込用紙などは12月にできたので、年明けとともに各種関係機関、協会、団体などに送付した。

1月23日に募金委員会の設立と第1回会議をかねた会合が東京大学でもたれた。募

金委員会委員には次の諸氏が依頼された。

秋山博一、猪野俊平、今堀宏三、岩本康三、尾形英二、川田三郎、斎藤恒行、須藤俊造、瀬木紀男、田中 剛、竹本常松、土屋靖彦、中村義輝、平瀬 進、広瀬弘幸、藤山虎也、松本文夫、右田清治、岡崎彰夫(幹事)、徳田広(幹事)。

その後、3月8日付で、さきに申請してあった寄付金指定の通知が大蔵省主税局長よりあり、昭和46年2月21日から同年8月7日までの期間に計909万円の範囲で免税措置による募金ができることとなった。

### 1971年

3月20日第4回実行委員会、昨年末に大蔵省より査定があった、海藻学会議への補助額6,403千円(ほかに文部教官の会議出席旅費日当の補助額3,900千円)にもとづいた実行予算案の作成を行なった。さらに北海道地区委員会でつくった資料(館協正和専門委員説明)をもとに会場使用計画を作成した。後に音響効果の関係から展示室と講演室の一つを交替した点を除き、会場使用はこのとき作成した計画案通りに実行された。

4月13日第5回実行委員会、会議への参加申込みの締切日は3月31日となっていたが、とくに、外国の関係学者達から「研究費予算の承認の時期が遅れているので締切日を延長して欲しい」などの希望がかなりあり、実行委員会ではいろいろ検討した結果、参加申込は5月一杯、講演申込は4月一杯まで受け付ける措置をとった。4月12日の時点での参加申込者数は229名(国内148国外81)であった。この日の委員会では、特別講演者の候補者と題目、名誉会員の処

遇、展示の内容と方法などについての協議も行なわれた。またプログラム委員会は西沢委員長のほか委員として岩本康三氏と千原光雄を決めた。また会議当日の資料カバンは新崎幹事が具体案を考えることに決まった。

5月21日。第2回組織委員会が会場の検分をかねて札幌パークホテルで開催された。ここで、これまで実行委員会で決めた事項の承認をうけた。特別講演者については、一般講演申込みの外人の中から選ぶことを原則とし、国籍、専門分野、業績、過去における海藻学会議での特別講演の有無などを考慮して検討した結果、次の4氏にお願いすることが決定した。Prof. R. C. Starr (アメリカ), Prof. R. Biebl (オーストリア), Dr. A. Jensen (ノールウェイ), Prof. W. Yaphe (カナダ)。

5月～6月はプログラム委員会にとって、恐ろしく忙がしい時期であった。6月上旬に発行予定の第3次サーキュラーに会議進行のタイムスケジュールとプログラムの大要を盛り込むことが決まっていたので委員会はその線に沿っての作業を進める必要があった。原則として、会場や日程の許すかぎり申込講演の取捨選択は行なわない方針をとり、また、内容は、申込講演や会場の部屋数、日程などを考慮して、(Ⅰ)分類と分布、(Ⅱ)生態とその応用、(Ⅲ)生理と培養、(Ⅳ)化学、生化学とその応用の4つのセクションに大別した。委員会が忙がしかったことの原因は主として別の点にあった。一つは4月末の締切日を過ぎてからも、講演の申込がかなりあったことである。締切日の過ぎていることは知っている

が何とか配慮をして欲しいとか、研究費予算の承認の遅延のために参加出来るかどうかの今までわからなかったの、などの手紙が添えられている。それと、講演申込はアブストラクトを添えて参加費ともども送るように、と第2次サーキュラーに明記してあるのに、講演申込とアブストラクトだけがきて、参加費の届かないものもあった。各国の研究費予算の申請、承認などの内情についての情報がだんだん蓄積されるにおよんで無下に却下するわけにも行かず、結局プログラム委員会としては、事情の許すかぎりのぎりぎりまで申込講演の採択に努力することにした。このため、たとえば、参加費未納の申込者、アブストラクトの届かない申込者などと委員会との間に数多くの手紙のやりとりが行なわれた。西沢プログラム委員長の部屋では2台のタイプの音で賑かな日が多く続いた。忙がしさの他の一つの原因はアブストラクト集の作成にあった。サーキュラーに原稿作成の規定を明記したのにかわらず、送られてきたものの中には規定を無視したような原稿が多かった。やむなく、原稿に朱で加筆あるいは変更指定などをした後に、タイプストに清書してもらうなど、余分な作業に手間がずいぶんかかった。

6月4日。第6回実行委員会、本会議会場の設営と運営、レセプションの内容、講演座長の選出の規準および第3次サーキュラーの内容などの協議と決定をした後に募金についての経過報告と検討が行なわれた。この頃の募金額ののびは悪く、予想額を大巾に下廻っていた。このため、実行委員も含めて今後の募金に一層努力すること

とし、また予定額に達しない万一の場合を考へて、総額が当初案の約 $\frac{1}{4}$ 程度の第二の実行予算案の協議と検討も行なわねばならなかった。

なお、この日は会議期間中のフィルムショウとして上映予定の“あさくさのり”の試写見学も行ない、本会議中の夜に“北海道の自然”との2本の上映を決めた。

6月24日。臨時実行委員会を東京教育大学で開催した。主な報告と議題はプログラム、展示、会場運営（使用室の明細表、人事表、使用調度表の作成）など、細かい具体的なことが多く、会議近しを思わせた。

6月30日。主としてプログラム作成の関係で発行の遅れていた第3次サーキュラーができた。このサーキュラーは英文17頁（付2図）からなり会議当日の諸行事の時間、場所、講演者名と順序、会場案内などを盛ったもので、第2次サーキュラーの場合とほぼ同じ手順で作成された。早速、参加申込者その他の希望者に発送された。

7月13日。第7回実行委員会、講演題目やアブストラクトおよび参加者名などを印刷した“アブストラクト集”ができあがりこの日披露された。i-xii+136pp.+30pp.におよぶかなりの厚さのものである。この日の委員会では、主に北海道地区委員会と学術会議事務局とが相談して作成した会議場の設営と運営の資料にもとづいて、登録場所、登録受付の手順、アルバイトの手配プロシーディングス用原稿の受付、会場と宿舎ホテル間のバス運行の手配、昼食、弁当の調達、報道関係者の扱い、電話の取りつけ講演会場内の机の配置等等、くわしい検討が行なわれた。

8月4日。さきに6月4日に検討した改訂第二実行予算案を作成することと、事務上の最後のつめを行なうために、臨時実行委員会を開いた。この日、さる7月28日付で報道された新聞記事に、海藻学会議について誤解を招くような表現の個所のあることが指摘され、今後、報道については、報道委員会（委員長西沢総務幹事）をつくり一切を同委員会を通して行なうことを決めた。

8月5日から6日にかけて外国からの参加者が羽田に続々と到着。6日朝にはヨーロッパからのグループフライトの到着、同日夕にはドン・EM旅行社のアレンジによるアメリカ・カナダ勢の大量到着などがあり、会議の前景気はいやが上にもあった。

8月7日 第3回組織委員会

8月8日 登録日、午前10時登録開始。午後1時30分より開会式、続いて特別講演2題。午後6時より8時まで学術会議会長の招待によるレセプション。

8月9日 室蘭エクスカージョン。

8月10日 一般講演、午後3時45分より特別講演、続いて午後5時より国際藻類学会総会、夜はフィルムショウ。

8月11日 一般講演、午後7時より北海道知事の招待によるレセプション（札幌グランドホテル）。

8月12日 一般講演、午後2時より特別講演、続いて閉会式。

8月13日～17日 関西エクスカージョン

#### エピローグ

国際海藻学会議の国際諮問委員会は本会議中、最初の日と最終日に会議を開き、次

回1974年の第8回会議の開催を英国に申入れた。代表委員 Dr. W. A. P. Black はスコットランドのエジンバラカウエールスのバンゴで開催することを約してこれを受入れた。会議の内容については、既に本誌(19巻,2号)に本会会長の広瀬弘幸先生が書かれており、そのほかにも幾つか報告がでることと思われるのでここでは省略する\*。

会議の収支決算はまだ完了していないが総計はおよそ17,500千円であった。

心配された募金も、その後募金委員長を初め募金委員やその他の関係各位の努力でほぼ予定額近くまで達した。お蔭で経費を心配しないで会議を進めることができ、また7~800頁にもおよびそうな大冊のプロシーディングスの出版の見通しもはっきりした。貴い浄財を寄付していただいた方達

に心からのお礼を申上げたい。

1968年より3年間、思えば長い年月であるが、あっという間に過ぎてしまった感じがする。会議が終って故国に帰った外国人達から私に届いた手紙には、どれも、素晴らしかった、大成功だったの讃辞が入っている。お世辞半分としても、これは予期以上の成功を収めたと判断してよいであろう。

さきに本誌(19巻,2号)で、広瀬先生も書いておられるように、この海藻学会議を開催するに当っては、学会議の関係議員および事務局の方々、組織委員会、実行委員会、募金委員会、北海道地区委員会および関西地区委員会の方々などの献身的な奉仕があった。心から感謝上げるとともに成功の喜びをともに分かち合いたいと思う。

\*たとえば、新崎盛敏：「第7回国際海藻学会議」に参加して。海洋科学3：49-57(1971)